

【事業実績】

1. ちのミュージアム・ピクニック

平成30年度は「自然と諏訪の信仰」と「縄文と八ヶ岳の恵み」、令和元年度は「八ヶ岳の恵みと人々の営み」と「凍みる冬に生きる工夫」をテーマに、分散して位置するミュージアムと、地域の文化資源のスポットをバスで巡った。参加者からは「個人で訪れるだけでは知る事が出来ない歴史や、地元の方々の生活を知る事が出来て楽しかった」という感想があった。地元紙においては開催時に「縄文時代から続く狩猟文化に焦点を当てた話を聞いた」とことや「茅野市内のミュージアムと地域の暮らしをつなぐミニツアーとして企画」したことについて記事で取り上げられた。

令和2年度はコロナ禍のため実際に巡ることは行わず、平成30年度と令和元年度の事業を振り返るレポートを印刷物とウェブサイトで作成した。茅野市の人口は約55,000人であり、「広報ちの」18,850部にレポート（印刷物）を折込むことで、茅野市のほぼ全世帯を網羅する形で、事業の成果を伝えることができた。さらに近隣施設での配布や、過去来場者2,500人程度へのDMも行ない周知することができた。

→<http://www.chinoshiminkan.jp/cm-report/>
<http://www.chinoshiminkan.jp/chino-museum/>



茅野市文化芸術推進事業レポート
（ちのミュージアム・ピクニック）

2. ちを編む みんなのサロン

平成30年度はその1～3を開催、令和元年度はその4～6を開催（その7は新型コロナウイルスの影響で中止）。「寒天」「縄文遺跡の発掘」「郷土食とボランティア」「農業とIT」「市民研究員」「里山」を切り口に、地元大学の教授をはじめ、地元の皆さんの取組みを直接うかがった。地域の文化資源を知り、また活かし方を学ぶ機会にもなった。茅野の魅力を見つけつつなが事業とすることができた。特に茅野の「里山」については、里山整備に関わる地域の4つのグループがはじめて集まった。グループごとの縦割りになってしまうので、「連携の必要性」が参加者から話された。地域の“宝物”を再発見する連続企画として地元紙において開催時に「人とのかかわりやコミュニティの大切さを実感した」、「いろいろな提案があった。もっと広い視野で自分の仕事を見なければと思った。発見があり、楽しかった」と参加者の声を取り上げられた。

令和2年度はコロナ禍のため実際に開催することはせず、平成30年度と令和元年度の事業を振り返るレポートを印刷物とウェブサイトで作成した。茅野市の人口は約55,000人であり、「広報ちの」18,850部にレポート（印刷物）を折込むことで、茅野市のほぼ全世帯を網羅する形で、事業の成果を伝えることができた。さらに近隣施設での配布や、過去来場者2,500人程度へのDMも行ない周知することができた。

→<http://www.chinoshiminkan.jp/cm-report/>
<http://www.chinoshiminkan.jp/chino-museum/>



茅野市文化芸術推進事業レポート
（ちを編む みんなのサロン）

3. 茅野市美術館を一緒にサポートしませんか＋9

地元の小学校や、他の美術館、大学などと連携し、美術館の活動やさまざまなアートについて知り、体験する講座を開催し、地域のコミュニティの中で活動する人材の育成を目指した。

きほん編 ※第1～5回までの連続講座としての受講は14人

第1回 美術館の仕事（1月31日18人）

第2回 茅野市美術館サポーターの活動（2月7日12人）

第3回 ネットで繋がる対話による作品鑑賞（2月14日28人）

第4回 他の美術館を知ろうー和歌山県立近代美術館の活動（2月23日29人）

第5回 美遊 com. 会を見学しよう（3月7日34人）

まなぶ編

見るを楽しむ～対話による作品鑑賞～（10月8日23人、10月9日21人、2月15日33人、2月17日63人） 対象：茅野市立湖東小学校2年生2クラス、永明小学校5年生3クラス

本年度で特徴的だったのが、2月14日の講座内で行なった、ネットを使った「対話による作品鑑賞」である。東京の自宅から

武蔵野美術大学学生が遠隔操作した分身ロボット「OriHime」をファシリテーターとした「対話による作品鑑賞」の体験に加え、茅野市美術館企画展示室と茅野市民館マルチホールに受講者が分かれ、それぞれの会場でネットを使った画面越しの「対話による作品鑑賞」を体験した。なお、武蔵野美術大学学生と

東京造形大学学生と地元作家の作品を展示し、学生と地元作家も鑑賞に参加した。この講座をふまえ、2月15日と2月17日には、茅野市立永明小学校5年生の各クラスと茅野市美術館企画展示室をネットをつなぎ、ビデオ通話での「対話による作品鑑賞」を行なった。コロナ禍で、クラス単位での美術館への来館が難しいと判断したためである。教室の中でも、画面の作品を良くみて、また友達の見方を聞く児童の姿がみられた。後半では作品の作者が登場し、児童からの質問に答えた。地元紙では「児童は題名やモチーフなどを想像しながら絵画に注目した」と紹介され、児童からは「作品の見方がいろいろあり面白い。作った時の気持ちも知ることができて良かった」との感想があった。

ネットを通じた鑑賞の経験が、実際の作品に向きあった時に、より鑑賞を深めることにつながることに期待したい。これらの中で、大学や地元作家とも連携し、小学校の児童を対象とした取り組みにつなげ、様々な立場の人々が交流し、学び合う機会とすることができた。受講者のアンケートには「一面だけでなく多方面からの見方が良かった」とあり、実際の現場の声や、場に触れることができたことについての評価も高かった。

茅野市の人口は約55,000人であり、その中で茅野市美術館では51人の市民サポーターが活動しているが、本事業を経て、連続講座（きほん編）の受講生14人のうち、新たに4人ものサポーターが加わり、大きな成果を得ることができた。

→<http://www.chinoshiminkan.jp/museum/2021/0131.html>
<http://www.chinoshiminkan.jp/chino-museum/>

2月14日 茅野市美術館企画展示室
ファシリテーターは「OriHime」



2月14日 茅野市美術館企画展示室
ファシリテーターは「OriHime」

2月14日 茅野市民館マルチホール



2月14日 茅野市民館マルチホール

2月15日 永明小学校5年生教室



2月15日 永明小学校5年生教室